

〈調査報告〉

沙流川筋中流域における、イナウに使用する樹木に関する報告(その1)

貝 澤 太 一

目次 1. 調査目的と方法

1. 1 調査目的と本報告の概要

1. 2 調査方法

2. 調査報告

2. 1 イナウ：inaw（木幣）に使用する樹木

2. 2 資料紹介

3. あとがき

1. 調査目的と方法

1. 1 調査目的と本稿の概要

本研究は、今年度から数年間、アイヌ民族の植物に対するつきあい方や考え方について、複数の情報提供者から詳しい聞き取り調査を行うことにより、これまでの先行研究との比較および、データベース作成を目的としている。従って本稿は、そのデータ紹介の第一回目となる。

今年度は1995年6月～12月の間で聞き取り調査を行ない、その中での、イナウに使用した樹木に焦点を絞っての紹介とする。なお、イナウに関しては、本稿のかぎりでは記載出来ない事項が多々あるので、本稿を報告（その1）とし、次年度以降に継続するかたちをとった。

1. 2 調査方法

今年度より数年間は、沙流川流域周辺の聞き取りを主に行っていく。

本研究の調査では、アイヌ語を話せる話せないにかかわらず、情報提供者がアイヌ語の話されていない環境に育っていても、“何となく昔からやっていた”とか“爺さんがやっていた”と言う様な感覚で、何気なくやってきた事に関しても聞き取りを行った。したがって、情報提供者に伝承の内容を聞いてもはっきりしない事や、その伝承経路も情報提供者の祖父や祖母の段階までしか

遡れない場合があった。従って今回はその伝承経路については、明記しなかった。

ここで、本稿での情報提供者を紹介する。

平取町旭	上田トシさん	(1912:大正元年)
同町二風谷	貝沢市太郎さん	(1915:大正4年)
同	青木トキさん	(1915:大正4年)
同	貝沢アサノさん	(1924:大正13年)
同町貫気別	黒川セツさん	(1926:大正15年)
同町二風谷	貝沢鉄雄さん	(1927:昭和2年)

2. 調査報告

2. 1 イナウに使用する樹木

イナウが、アイヌの祭儀や日常生活に於いて重要な位置にあることは、これまでの様々なアイヌ研究の論文で述べられている。

イナウには、それに使って良い木と悪い木が有り、また、使って良い木でもそれを使用する場面は変わっていく。それは、使用する木の持つ性質(堅さ、匂い等)の特徴や、その木の精神(性格の良い木、悪い木)⁽¹⁾ からくると考えられているようだ。また、イナウの材になる木は、その地域によっても、その用途に違いを見せている。そしてイナウを捧げる神によってその材を変えたり、樹木にもくらいがあったりもすると言う。

本稿では、今年度の調査(1995年6月~12月)のデーターの中で、イナウに使われた樹木として聞き取ることの出来た、シコロ、クルミ、エンジュ、ミズキ、ヤナギ(順不同)の各樹木を、イナウ以外の使用方法も含めて1. 調査データー 2. 『知里真志保著作集 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』⁽²⁾ 3. 「樹木と共に」(尚()内は、書内の番号と頁を示す。)⁽³⁾ 4. その他の文献の順で関係すると思われる部分と併せて、比較参照出来るように記載した。

なお、説明の文末に記載した括弧とじは情報提供者の名前、数字は調査年月を表している。また、※印が文頭に付いている文以外は、情報提供者の言葉をほぼ忠実⁽⁴⁾に記載している。

(1) 本稿における情報提供者は、木の種類によって、悪神を寄せ付けない木、お喋りな木のような分け方したり、同じ種類の木でも天に向かって真っ直ぐ伸びる木を素性の良い木、だとか、異常に曲がって伸びる木を性格の悪い木、と言うように木にも性格があると考えている様であった。

(2) 知里真志保 『知里真志保著作集 別巻1 分類アイヌ語辞典 植物編』 1975

(3) 萱野 茂 「樹木と共に」『炎の馬』 付録 1977

(4) 言葉(日本語)が解り難く言いどんだりした言葉や、同じ事を何度も繰り返す(例: わし、わし、わつし)などの言葉は、著者の判断により言い換えたり省略したりした。

2. 2 資料紹介

01) キハダ（シコロ）

1. 聞き取りによる記載

○イナウとしての用途

・神様に頼み事するとき、イナウにする木で一番上にあるのがシコロの木なんだ。山でも何処でも、不便な所で怪我したり病気したりしたとき、一番先に頼み事するのがシコロの木のイナウなんだ。どんな時でも、一番難しい病人でもけが人でもでて死ぬか生きるかって言うときに、カムイ：kamuy（神）に頼む時に、そんなときに使うのがシコロの木のイナウ。家でも山でも一緒。シコロの木のイナウを使って、カムイノミ：kamuy nomi（神に祈る）をする。ただ、シコロの木は、まだ生（乾き）のうちに作るなら良いけど、乾燥させるのに苦労するし、扱いづらい木なんだ。（貝沢市太郎）(95.11)

※上記の、木の乾きかたについて。

現在、良くイナウに使われているヤナギは、約一週間くらいでイナウケ：inauke（イナウ削り）に丁度いい具合になる。シコロはそれよりも早く5～6日で乾ききってしまう。だから、その乾かし方が難しいらしい。ちなみに、ミズキはさらに乾きやすく扱いにくい。また、もし乾き過ぎたときは、水に浸しておく、と、いくらか湿って造りやすくなるという。（貝沢市太郎）(95.12)

※この、シコロの木でイナウを作る場面は、たとえば、2～3人で山に入りその内の誰か一人が、死にそうな怪我や病気になった時であり、その作り方は、下記の要領である。

1. シコロを採ってきて、外皮を剥く。
2. 内皮の、綺麗な黄色の皮の部分を使って、5～6本の削り掛けを持つイナウキケ：inawkike（イナウの削りかけ）⁽⁵⁾を作る。
3. わりとどこにでも生えているドスナラなければエンジュを採ってきて、イナウの親木（太さは、直径約5cmの250cc缶くらい）にして、木の上部の方に、造ったイナウキケを鉢巻のように巻く。
4. その鉢巻と親木の隙間の部分に挟むように、親木一本にイナウキケを8～10本刺していく。
5. そして、まず水の神様、そして山の神様の順でカムイノミを行う。このとき水の神様も山の神様も、女性と考えていた。（貝沢市太郎）(95.12)

・家の中でも同じような場合には、これと同じ事をする。また、普段からもお守り代わりとして、

(5) 市太郎さんは、これを指して“普通のイナウ”と呼んでいた。

また、いつこのようなことが起きても良いように、なるべくシコロのイナウ(イナウキケ)を持って行ったものだ。(貝沢市太郎)(95.11)

○イナウ以外の用途

・シコロの木は、よく(内)皮を剥いで煮立てて煎じて、その汁を飲む。(貝沢アサノ)(95.11)

・お産の後に、へその緒を切ったあと、そのへその緒がとれたら、やっぱり傷負けのする治りにくい赤ん坊⁽⁶⁾に、シコロの皮を乾かして乾燥させといて、そしてそのシコロの皮を、切れる包丁⁽⁷⁾でも削ると綺麗なまっ黄色な粉が出る。そしたらその粉を、へその緒がとれた後に付ける。そうすると、二三日で良くなる子もいれば、傷負けで一週間かかる子もいるけど、そのシコロの粉でなおった。(黒川セツ)(95.09)

・キハダ(シコロ)の木は、黄色くて綺麗だから、良く彫刻に使った。(貝沢鉄雄)(95-07)

・痔になったとき、シコロの(内)皮乾かしたやつを煎じて、トイレに行ったときに、熱くした煮(煎)汁にタオル浸して患部に温湿布のようにして張っておくのが、痔には一番良い。(青木トキ)(95.12)

・シケレペ：sikerpe(シコロ)のニカッ：nikap(木の皮)も使うけど、シケレペの実あるでしょ。その実だけ採ってやかんに入れて、そこに玉砂糖でも入れて煮たらして、長く煮込んだら、餡み⁽⁸⁾たいになるんだよ。長く煮るったら、アイヌ イタッ：ainu itak(アイヌ語)でオホンノ アポッテ ワ：ohonno a=popte wa(長く煮立たせる)って言うんだけど、時間かけて煮て玉砂糖を入れると餡みたいになって、それを瓶にでも入れて箸でなめると、甘苦くて扁桃腺に良いって。

シケレペの種は、種だけではあまり使わないけれど、あれをかじってカリカリする事を、キッヌキッヌ：kitnu kitnuって言うんだよ。

シケレペの皮は5月末～6月までの間に採りに行ったら、皮を剥ぐときにくそ皮⁽⁸⁾と内側の皮⁽⁹⁾が一緒に根本から一気に剥がせる。そして外側を削って、ホントの中身の木の肌に付いていた綺麗な黄色い内側の皮だけにして乾燥させる。それを削って、そしたら黄色い綺麗な粉が出る。それを、そのままの状態か油か何かで練って、赤ちゃんが産まれてへその緒がとれた時に、でべそになったりしないように、へそに付けてやると良い。

(6) 生まれてから、へその尾がとれた赤ん坊全般を指すのだが、ここでは特に傷負けのする子と言っている。

(7) この時の乾燥させる皮は、外皮の内側にある薄い内皮の部分を使う。乾燥した内皮に対し、刃を直角か、刃物を動かす方向の反対に向かって寝かせて削る。

(8) 樹木の一番外側になっている皮。外皮。

(9) その外皮のすぐ内側にある、薄い皮。内皮。

他にも、赤ちゃんの股ずれや擦り傷なんかに、傷負けしないように付けた。それこそ、今で言う天花粉のような物。また内側の皮を同じように乾かして、煎じてその煮(煎)汁を飲むと、胃の薬にもなる。(上田トシ)(95.12)

2. 『分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』における記載

(前略)・・・ 北海道各地で、キワダの木で金で、ミズキで銀で、ハンノキで銅だと云われ、最も尊い神へ捧げる木幣をこの木で作る。美幌でわ、熊を送るときだけこの木で作った木幣を使う。

また、飼熊の食椀「ペウレブ・オイペビ」(pèwrep oiipepi)もキワダで作るが、それは金の椀「コンカニ・イタンキ」(kònkani itanki)で御馳走する意味だという。天塩川筋でわ熊よりもエゾフクロオを尊び、エゾフクロオを送るときはキワダの木幣を使い、熊を送るにわミズキ、沖の神を送るにわハンノキの木幣を使う。(§ 172 p102~104)

3. 「樹木と共に」における記載

シコロ(キハダ)=表面は灰色がかったコルク状になっており、内側の皮は黄色。太さ二尺。闊葉樹としてはやや堅い方。木目は鮮明に出ている。アイヌ語でシケレベニ。ブドウのような実が成る。その実をとって置き香辛料として用いる。・(中略)・木の内側の黄色い部分をはいて乾燥させ粉にしたものを、打ち身や挫きをしたときに水で練って患部に張ると効き目がある。また、染め粉がわりに昔は使った。(25 p282~283)

4. その他の文献による記載

・タクサコロイナウ<takusa-kor-inaw=日本語 手草・持つ・木幣>は一名ルエシュトイナウ<ルエシュトウイナウ rue-sutuinau=太い・棒幣>ともいう。長さ 110 糎、径 5 糎の樹皮を其のままシコロ(一名キハダ)アイヌ名コンカニ或いはシケレベと呼ぶ木で造り・・・⁽¹⁰⁾

・シコロ(キハダ)は、北海道各地で用いられ、コンカニ<konkani=黄金>とも呼ばれ、その地方で最も尊い神に捧げる木幣の材になることが多い。また樺太ではその使用例は見られない。

シケレベニ<sikerpe-ni=シコロの・木>は木幣の材料となる木のうちに最高の位に位置するもので、この木で作った木幣のことをコンカニイナウ<konkani-inaw=日本語 黄金の・木幣>という。⁽¹¹⁾

・キハダは神の国では金で、ミズキは銀だとされ、それらで造られた木幣は神の国へ行けばそれぞれ金銀の幣になるので、神に喜ばれるのだという。⁽¹²⁾

(10) 名取武光 「沙流アイヌの熊送りの於ける神々の由来とヌサ」『北方文化研究報告 第四輯』 1931 p73

(11) 北海道開拓記念館 『民族調査報告書—総集編—』 1975 p83

(12) 網走市 『網走市史上巻』 1955 p1335

02) ミズキ

1. 聞き取りによる記載

・ミズキはアイヌ語でウトゥカンニ：utukanniと言い、それはイナウネニ：inawneniと言われるくらいイナウとして良く使われた。チセ コロ カムイ：cise kor kamuy (家の神様)などに使う木だよ。(上田トシ)(95.11)

・ミズキはイナウとして使ってはいけない場面はない。ミズキは素性の良い木だから、絶対に悪いことは無い。(上田トシ)(95.12)

・昔からイナウネニって言って、昔はそこら辺じゅう何処にでもあって、それでちゃんとこしらえて、カムイノミした。(黒川セツ)(95.09)

2. 『分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』における記載

この木わ、木幣の材として、キワダに次いで重要な木である。天国でわキワダわ金で、ミズキわ銀で、ハンノキわ銅だと云われ、ミズキで作った幣わ天国へ行くと銀の幣になると考えられている。

幣わ普通ヤナギで作るが、神に特に敬意を表する場合にわミズキで作る。・・(中略)・・

この打頭棒を普通わヤナギで作るが、古い人わ特にミズキで作る。ミズキで作れば銀の幣を捧げることになり神に喜ばれるからである。(§ 102 p57~59)

3. 「樹木と共に」における記載

ミズキ=表面は赤味をおびてすべすべしている。太さ七、八寸。木目はやや鮮明。質は柔らかい。アイヌ語でウトゥカンニという。神に捧げるためのイナウを造る材料とする。イナウは特殊な場合を除いてヤナギとミズキの二種類の木に限定して造るが、とくにミズキで造ったイナウを上等のものと考え、神の国に行った場合ヤナギのイナウは白銀、ミズキのイナウは黄金に成るといわれた。ミズキを削った木肌が黄色味をおびているのでそのように考えられたのであろう。(49 p289)

4. その他の文献による記載

・(前略)・・・北海道で一般的な単語としてはutukanni(ウトゥカンニ) utukani(ウトゥカニ)が多く使用されている。礼文華、長万部で収録されているinawnani(イナウナニ)、inawnini(イナウニニ)は正しく木幣に使用されている木を示しており、inaw-(イナウ-)を冠する樹木はミズキの他にヤナギ、ナナカマダがあるのみで、その使用度の高さをものがたるものであろう。⁽¹³⁾

(13) 北海道開拓記念館 『民族調査報告書—総集編—』 1975 p82~83 尚、()内のカナ標記は著者の判断により、読み易いように付けた。

03) ヤナギ類

1. 聞き取りによる記載

・イナウ チェホロカケッ タ : inaw cehorkakep ta (木幣、チェホロカケッを彫る) とか言って
アペサム タ : apesam ta (いろいろの側に) 立つっしょ。ああいうのは、ヤナギだと思う。
(上田トシ)(95.11)

・昔はミズキを使っていたけど、今は、みんなヤナギでやりやすいから、ヤナギを使う。これは
木の上で、一番位が下なんだ。性分の良い木だし、乾燥しやすく扱いやすい。(貝沢市太郎)(95.07)
※この時、よく使うヤナギはシロヤナギという種類であり、絶対に使わないのがバッコヤナギと
いう種類である。バッコヤナギは、ぐにゃぐにゃ曲がって育つから良くない木だと教えてくれた。
(貝沢市太郎)(95.12)

2. 『分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』における記載

ナガバヤナギ

この木わ、その名の示すごとく、それで幣を作った。樺太の子供らわこの若い花穂を幾つも繫
いで犬ぞりだと言って家の中をひいて歩いた(白浦)。天塩でも、子供わこの花穂を取って来て犬
だと云って遊んだ。時にわその一つ一つに縄を巻いて樺皮を焼いていぶし、縄を解いて、ぶち犬
だと云って遊んだ(名寄)(§ 322 p190)

3. 「樹木と共に」における記載

ヤナギ(詳しい種類は不明)=川ヤナギは表面が薄い緑色で細い縦筋がある。太さは一尺。木目
はあまりはっきりせず質は柔らかい。アイヌ語でススという。イナウの材料。その昔、アイヌの
国土を造りに来た神が地上で使った箸を、神の国に持ち帰ることをはばかって大地につきさして
帰ったところ、その箸からヤナギが生えたという伝説があるところから、イナウを削る材料はや
なぎになったのだと。(53 p290)

4. その他の文献による記載

北海道・樺太を問わずヤナギ類は木幣の材料として多く用いられている。植物篇p186～191のヤ
ナギの項には36語(茎30、花4、樹皮1、繊維1)にわたり単語が収録されているが、北海道・
樺太の全域にわたりスス<susu>がヤナギの総称として用いられている。また、ナガバヤナギの
項にはイナウネスス<inaw-ni→ne-susu=木幣に・なる・ヤナギ>の単語が収録されており、ミズ
キ同様、木幣に使用される頻度の高さを示すものであろう。⁽¹⁴⁾

(14) 北海道開拓記念館 『民族調査報告書—総集編一』 1975 p83

04) エンジュ (イヌエンジュ)

1. 聞き取りによる記載

○イナウとしての用途

・ツクベニ：cukubeni⁽¹⁵⁾ と言うのは、昔は具合悪くてエポタラ：epotara(病魔払い)するってエカシら来て、その具合悪い人にエポタラしに来た場合には、そのツクベニのイナウこしらえて、たとえばこの人がいま病気になるから、カムイ エプンキネ クス ネ ナ：kamuy epunkine kusu ne na(神様が守っているよ)って言って、それを、枕元に立てて、カムイノミするのは見たことある。そのイナウは、火の神様に先に

ツクベニ カムイ ネ ヤッカ

cukubeni kamuy ne yakka : エンジュの神様であっても

カムイ エプンキネ フオ トッラ タパン

kamuy epunkine huo⁽¹⁶⁾ tura tapan : 守り神が、元気を連れてくるんだよ

たれその名前言ってから⁽¹⁷⁾、言って、

エプンキネ ワ トッナッノ トテッ クス ネ ナ

epunkine wa tunasno totek kusu ne na : 守られて、早く治るんだよ。

ていうようなこと言って、カムイ セレマッ ウシ：kamuy sermak us(守護神がつく)って言うんだよ。って言ってイナウ立てたのは見た。(上田トシ)(95.11)

※上記の項目について上田トシさんに、質問形式に聞き取りをした。

問：エンジュのイナウはどんな形しているの。

答：エンジュのくそ皮を剥いて、肌の綺麗なところ⁽¹⁸⁾が出たら、そこを使ってイナウケする。形は、キケパラセイナウ：kikeparseinaw⁽¹⁹⁾と似ている。ツクベニ イナウはそんなに長く置く物

(15) 上田トシさんは「チクベニ：cikupeni」(注(2)参照)のことを「ツクベニ:tukubeni」と発音していたが、同じエンジュを指す。

(16) 久保寺逸彦 『アイヌ語・日本語辞典稿』 1992 p92-294

(17) 病気をしている誰かの名前言って、

(18) 内皮のことを言っている。

(19) 写真(『アイヌ民俗誌 下』 1969 p635 写真369)を参照しながら話してくれた。

でないから、大きな物ではない。

問：患者のどの辺に立てた。

答：病人が寝ているすぐの枕元でなく、少し離れたところの壁に置く。病人を守るための神さん⁽²⁰⁾だから、炉縁には置かないで、病人の近くに病人をエプンキンネ：epunkine（守る）する為に置く。炉縁のない最近の家でも、病人が寝ている部屋の壁に置く。

問：そのときの病人の反応は。

答：病人は ツクベニ カムイ フオ トゥラ エネプンキネ ワ アンベクス クライケ ソモ キ アン コロ ワ：cukubeni kamuy huo tura en=epunkine wa anpe kusu ku-rayke somo ki an kor waと言った。要するにツクベニ カムイがしっかり自分を守っているから、自分は死なないでいるという意味のことを言った。

問：その手順は。

答：ツクベニ イナウを作ったら、それを先にアベサム タ 火の神様に置いて「こう言うわけで病人がいるので、その病人を守ってくれ」と言って、神様⁽²¹⁾をツクベニ イナウに入れてから枕元に置いた。そうしたらツクベニ イナウには、独特の匂いが有るから、病気の神さん⁽²²⁾を、そのフラ ハ：huraha（匂い）が追い払って、病気を治してくれると考えている。

問：その病気が治ったらどうするの。

答：そのまま普通に、米と酒を付けて、送ってやると思う。

問：そのまま治らなかったら。

答：私が、このツクベニ イナウを使っただけを見たのは一回だけで、そのときは、その人は病気が治らなかった。だからそのときは、死んだ人を送るより前に、ツクベニ イナウを送った。

（上田トシ）(95.12)⁽²³⁾

○イナウ以外の用途

・人が死んだとき、昔は土葬だったから、その死んだ人を埋ける前にイケマ⁽²⁴⁾をメウパ メウパ：mewpa mewpa(=メウメウパ：mewmewpa)⁽²⁵⁾（ちょっと削って）して、その箱の上に投げて埋ける。そして、それ終わって、ちゃんとお墓の格好こしらえたりしたら、その上にまた乗せるものは、ツクベニの枝⁽²⁶⁾。細い枝な。こんな、エチャ クラッ：eca kuras（枝の先の部分を切り取

⁽²⁰⁾ 病気を治すために、エンジュのイナウを作り、火の神様にカムイノミをしたときに、イナウに乗り移った神様を指し、ツクベニ カムイと言っていた。

⁽²¹⁾ 火の神様のことを指す。

⁽²²⁾ 病気をもたらす悪神を指す。

⁽²³⁾ これは上田トシさんが、穂別町の富内から来た翁がやっているところを、見たものだと言っていた。

⁽²⁴⁾ イケマはこの様な、お守り的に使われる事が多い。今後の調査でまた詳しく調査する。

⁽²⁵⁾ 中川 裕『アイヌ語千歳方言辞典』1995 p377の単語と同じ意味で使っていると思われる。

⁽²⁶⁾ この枝の長さは50cmぐらいで、木の枝の先の方をとって使う。仏さんは、この枝をお払いをするように振り回しながら自分の親元に行くから、あまり長すぎず丁度良い長さにする（上田トシ）(95-11)。枝の振り方は実際に身振りで示してくれた。

った木片) っていうんだけど、それを墓の上にのせて昔は帰ったもんだ。なぜなら、ツクベニの枝を、ちゃんと行く仏さんに、あの世で途中よけいな者がいて、それにちょされたり⁽²⁷⁾ したら、ちゃんと行く所に行けないから、このツクベニの枝で、ヤイエワレワラ: yay-ewarewar(自分に・息を吹きかける) っていうのは、ほろいながら行きなさいって言う意味で置くらしいよ。

(上田トシ)(95.11)

・エンジュの木は、匂いは強いし、腐り難く堅いからお墓に使ったりもした。(上田トシ)(95.12)

・魔除けに使ったのはエンジュの木だ。エンジュはチクベニ: cikupeniだ。今は彫刻に使っているけども。(貝沢市太郎)(95.07)

・エンジュは、イナウケを刺す親木としてときどき使ったし、昔もそうだけど、今でもエンジュやイケマの木の切れ端を、お守りのようにいつでも持って歩くと魔除けになる。(貝沢市太郎)(95.11)

・エンジュは乾けば堅いけども、乾ききらない内に彫刻材とかによく使う。(貝沢鉄雄)(95-07)

・ナラやカツラ⁽²⁸⁾ やエンジュのすらっと真っ直ぐに伸びた木は、精神の良い木だって: ekasiに教えられていたから、山歩いて、そんな木を見つけたら必ず、こうやって山に来たんだから何事もなく元気で帰れるように今日一日守ってください、って言って、その木にカムイノミして山歩くと、何も怪我ないで、茸でも何でも沢山採って無事に帰ることが出来る。(黒川セツ)(95.09)

2. 『分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』における記載

この木わ、強い臭いを発するので悪神が近づかぬと信じ、枝を取って来て、或いわ皮とイケマの根と一緒にして、魔除けに、戸口や窓口にさした(幌別)。。(中略)。。家の神の木幣わ、必ずこの木で作る。そういう大切な木だから粗末に扱ってわならない。焚き木などにすることわ決してない(様似)。。。。(以下略) (§ 185 p108)

3. 「樹木と共に」における記載

エンジュ=表面は濃い茶色でややすべすべしている。太さは二尺、木目は北海道の木の中で一番に美しい。質は堅い。アイヌ語でチクベニ。チ=我ら、ク=飲む、ペ=雫、ニ=木、つまりその雫を飲む木と名付けている。。(中略)。。アイヌが家を建てる場合、掘って立て柱にこの木を使うと三十年くらいはびくともしない。火にくべるとよく燃える。流行病の噂を聞いたら、この木を

(27) (行く手を) じゃまをされたり、阻まれたりすること、と教えてくれた。

(28) この二種の木も精神の良い木とされている。今後の研究としたい。

入口にさして置けば、あの強い臭いを嫌って病気の神が寄りつかないと信じられていた。

また、枝を煎じて飲むと風邪が癒えるとか、夜外を歩くときエンジュの枝をついて歩けば魔物も避けて通るともいわれた。アイヌの墓標もエンジュを用いるが、・・・（以下略）（13 p278）

4. その他の文献による記載

・Chikubenikamui(＜cikupeni kamuy) ㇿんじ(＜エンジュ)の木で作った守り神で、ㇿんじの木は異様の臭気があるために、魔神がそれを恐れると考えるから、何かまじないをする時には、ㇿんじの木で守護神を造って頼む。・・（中略）・・家族の平安などを祈りたい時には、例えば子供が弱いとか、或いは家族の誰かが特に危険な旅に出た様な場合には、チクベニカムイは非常に力の強い神であるから、こしらえて頼むことに、オキクルミのウパシクマに依って決められている。・・（中略）・・この様な強力な神ほど恐ろしいので、その用事が済むと、直ぐに送って終わらなければならぬが、矢張りの木の神の一族であるから、これを送る時にはラムヌサ即ちシランバカムイ、立木の神のヌサに送るのである。⁽²⁹⁾

・人を呪うときはエンジュの幣を用い、流行病を避けるには悪臭を発する木、或いはとげの生えている木で木幣を作って分かれ路とか家の戸口、窓口に立てる。⁽³⁰⁾

・風邪がはやると、エンジュの木で木幣を作る。

エンジュは、その樹木から発する悪臭があるため、魔除けの木幣の材として用いられている。⁽³¹⁾
樺太では見ることが出来ない。

05) クルミ（オニグルミ）

1. 聞き取りによる記載

悪い神様を送るのには、当たり前のミズキやヤナギのイナウは使わないで、クルミの木で作ったネッコ イナウ：nesko inaw（クルミ・木幣）を使ってお払いしてやる。悪い神様を送るときは、当たり前の良いイナウは使えないから、ネッコ イナウを持たせてやる。

たとえば、蛇でも神様で一番くらいの高いのがいる。そしてその位の高いのが人間を守っているとすれば、それはそれは立派なイナウをいつでもあげなきゃいけないけど、その人間がもしか何かで具合悪くしたとか、ちょっと何か事故でもあったとか言うときは、悪い龍神様(蛇の神様)が悪さしてるんだから、ネッコ イナウでカムイノミしてやれって言うんだわ。

だから、おばさんも守られているんだけど、その悪さして、おばさんの具合を悪くして、近くに居たトゥス：tusu(占い)できる人に見てもらったら、こうやって今までおばさんを守ってきた

(29) 名取武光「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の出来とヌサ」『北方文化研究報告 第四輯』 1931 p39

(30) 網走市『網走市史上巻』 1955 p1335

(31) 北海道開拓記念館『民族調査報告書—総集編一』 1975 p85

神様だけど、時々違う悪い神様つくんだって。それが悪さをするのであれば、ネッコ イナウをこしらえてホプニレ:hopunire(神の国へ送る)してしまえって。悪い神様を治めてしまえって。

だからネッコ イナウは良いことには使わない。(黒川セツ)(95.09)

※悪い神様を治めてしまうと言うのは、人の具合を悪くするのが龍神様(蛇の神様)であって、それを神の国へネッコ イナウと共に追い払う。そもそもネッコ イナウはその様なときだけ使うという。良いことには使わずに、悪い神様(蛇の神様)を送るときのみ使う。(黒川セツ)(95.09)

2. 『分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』における記載

オニグルミ

(前略)……。北海道の北東部(天塩、北見、釧路)でわ、熊祭りの際必ず「クルミまき」(「ウコニヌムチャリ」ukòninumchari[u互い、koに、ninumクルミ、chariまきちらす])ということをする。お祭りなど、人集まりの所へわ悪神たちも寄って来るので、それを遠ざけるためにするのだという。こういうクルミわ、拾っても家の中へ持ち込むものでわない。悪神にやったものだから、それを持って入れば悪神もついて入るというのである。

美幌でわ、蛇に捧げる幣だけをこの木で作った。また足寄でわ、狼神に捧げる幣をこの木で作った。なお、名寄でわ、春先この「樹液」(ni-wakka)を取って飲んだ。(§ 313 p184~186)

3. 「樹木と共に」における記載

クルミ=灰色の太い縦縞で、太さ二尺。木目は鮮明で木質は闊葉樹としては中ぐらいの堅さ。アイヌ語ではネッコ。秋近く実をつける。あまり大きい実ではないが子供たちは拾ってきて、焼いては中身をほじって食べる。クルミの木の皮は染め物に使う。模様つぎござを編むとき、黒と茶を編み込むが、この黒をクルミの皮で染めた。・・(中略)・・黒いシナ皮は、墓標に巻く四つ編みの紐を編むときに必要なので、黒はたくさん染めておいたものである。(18 p280~281)

4. その他の文献による記載

- ・クルミは蛇神、狼神など、ある限定した対象物にのみ使用されている。⁽³²⁾
- ・クルミの幣は蛇神に捧げるのに用いられる。⁽³³⁾

3. あとがき

本稿では、いわゆるこれまでこの研究に大きく関与しているお年寄り達ばかりでなく、これまで昔のことなど話したこと無いとか、今頃話したって何になる、と言っていた人たちにも話を聞

⁽³²⁾ 北海道開拓記念館 『民族調査報告書—総集編—』 1975 p86

⁽³³⁾ 網走市 『網走市史上巻』 1955 p1335

くことができた。これは、非常に有意義であったと考える。

しかし本稿の調査において、お年寄りと同行して実際に山の木々を見ながら、実践状況（実際に造り習うことも含め）も取材し、映像もしくは写真にまとめるつもりであったが、山に入る機会がなく、野外調査は行うことが出来なかった。そのために、お年寄り達の話しに木の種類などのいくつか不明な点が出たが、それを実物と確認する事は出来なかった。

今後、本稿に掲載した植物に対する更なる調査を含め、さらに多くの種類の植物を、利用方法として、薬用、食用、衣類、建材、などの項目に分けていきながら、研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

- アイヌ文化対策協議会 「生活」『アイヌ民族誌 上』 1969 第一法規
網走市 『網走市史 上巻』 1958 網走市
萱野 茂 『アイヌの里 二風谷に生きて』 1987 北海道新聞社
『アイヌの民具』 1978 アイヌの民具刊行運動委員会
「樹木と共に」『炎の馬』付録 1977 すずさわ書店
木下 良裕 『アイヌの疾病とその治療法に関する研究』 1983 トヨタ財団助成研究報告書
久保寺逸彦 『アイヌ語・日本語辞典稿』 1992 北海道教育委員会
高倉新一郎 「アイヌの農業」『アイヌ研究』 1946 北海道生活協同組合
「イナウ」『アイヌ民族誌 下』 アイヌ文化対策協議会編 1969 第一法規
知里真志保 『知里真志保著作集 分類アイヌ語辞典 人間編』 1976 平凡社
『知里真志保著作集 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』 1975 平凡社
中川 裕 『アイヌ語千歳方言辞典』 1995 草風館
名取 武光 「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」『北方文化研究報告 第四輯』
1931 北海道大学（『北方文化研究報告 第二冊』 1987 恩文閣出版）
北海道教育委員会 『昭和61～平成6年度 アイヌ民族文化研究報告』 1986～1994 北海道教育委員会
北海道開拓記念館 『民族調査報告書一総集編一』 1975 北海道開拓記念館
牧野富太郎 『原色牧野植物大図鑑 正・続編』 1983 北隆館
宮部 金五 『北海道主要樹木図譜 普及版』 1986 北海道図書刊行会
森竹 竹市 「原始林」『近代民衆の記録 5 アイヌ』 p394～412 1972 新人物往来社
早稲田大学語学教育研究所 『アイヌ語音声資料(1～6)語彙』 1991～1993 早稲田大学語学教育研究所